

C 班報告 出版社 2025I 社

同志社大学 社会学部 社会学科
藤本研究室
鶴原 翔太

I 社では、X X学やZ Z学などの分野を中心とする「学術書」を出版している。学術書は、おもに大学教員、大学院生、大学生を读者として流通しており、大学の教科書などに使用される他、研究者の論文作成の参考文献として購入される場合も多い。これらの用途から見えるように、学術書は特定の学問分野に関する専門的知識を读者に伝える役割を担っているため、一般向けの書籍以上に、内容の正確性や資料としての信頼性が重視される。このような厳格な品質管理が求められる場では、先端技術への期待もある一方で、その不確実性への懸念も根強い。出版業において AI を利用することは様々なリスクが伴うのである。未発表の書籍の原稿を生成 AI の仕組みの中に投入し、意図せず AI の学習データとされてしまった場合、著作権上の深刻な問題が発生してしまう可能性がある。そのため、原稿整理や下読み、校正などの用途に AI を使うことは難しいというのが現状である。このように、出版物の信頼性と権利保護の観点から、AI の導入には他業界以上に慎重な判断が求められている。

ただし、制作業務の効率化や表現の幅を広げるために、リスクを考慮した上で学習されても問題ないと判断されたデータに関しては AI の活用の余地があるとされる。つまり、全ての工程で一律に AI を避けるというわけではなく、利用可能な範囲を見極めながら導入する姿勢が取られているのである。例えば、I 社は書籍内で使用する素材を作るために、商用利用が可能なストック素材を活用できる、大手クリエイティブソフトウェアの画像生成 AI 機能を利用している。同ソフトが提供しているストック素材は、基本的に権利関係が明確にクリアにされたうえで学習素材として用いられているため、当該画像生成 AI を通して作られたものに関しては、利用されている。これにより、従来は膨大なコストや時間を要していた図やイメージの制作が迅速化されるようになったのである。

また、i 氏は、企画段階で AI を「壁打ち」の用途に利用することの可能性も挙げている。アイデア出しや、企画案のたたき台としては、効果が期待できると考えている。AI に対して特定の専門家や読者層などの役割を与えるプロンプトを設定すれば、単なるキーワードの羅列にとどまらず、より多角的なフィードバックを得ることができると想定される。こうした使い方によって、人間だけでは気づきにくい新たな発想を得られる可能性もある。さらに、AI によって物語を作成し、その視点を変更してリライトさせるなど、創作の分野での活用への関心も示された。ただし、その場合も懸念されるのは学習データに関する著作権の問題についてのリスクであり、生成されたものが類似した既存の作品を参照していないかどうかを確認する必要があるのではないか、としている。そのため、AI による創作物を利用する際には、人間による最終的な確認が欠かせないのである。

加えて、i 氏は「専用型 AI」と「汎用型 AI」の違いにも注目している。ChatGPT や Gemini などをはじめとする汎用型 AI は、先述のアイデア出しの他、目次の作成や問いの設定などの用途では十分使える一方で、出版業の核の部分には未だ容易には使えないのが現状である。だが、出版用途に特化した専用型 AI がスタンドアロンで廉価に利用できるようになれば、現場での活用の幅は大きく広がる可能性があると考えられている。

以上のように、I社ではAIを慎重に扱いながらも、未知なる領域への活用に向け、前向きに模索している。このような活用を実現するには、技術の発展に加え、安心して利用できる環境整備が不可欠である。今後、専用型AIが発展し、ガイドラインの整備が進めば、出版業におけるAI活用は補助的役割にとどまらず、さらなる活用が実現すると考えられる。



***イメージイラストはAIで生成**